

アスベスト被害者に希望の光 「中皮腫」治療法に迫る



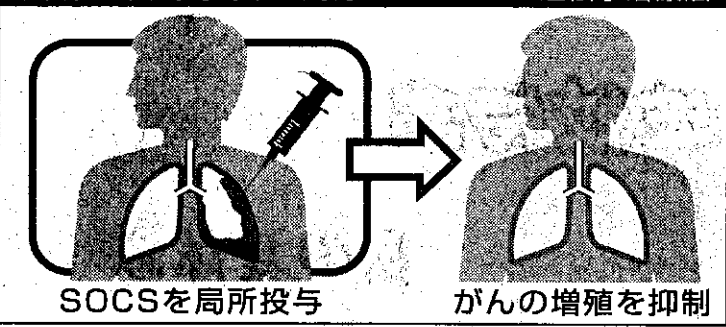
医療基盤研究所で行われている細胞周期の解析作業

かつて建築用の断熱材をはじめ、幅広く大量に使われたアスベスト(石綿)。そのアスベストが肺を覆う胸膜に侵入し、30~50年という長い潜伏期間を経て発症する難治性のがんが、中皮腫だ。早期発見が難しく、5年生存率も3・7%と極めて低い、この病に對し画期的な遺伝子治療法の開発が進んでいる。希望の治療法の現状と課題を追うとともに、開発の中心者・仲哲治博士に話を聞いた。

「全国の中皮腫の患者が、いつ治療を受けられるのかという切実なメールが多数寄せられている」と語るのは、大阪府茨木市にある独立行政法人・医療基盤研究所の仲哲治博士。中皮腫を根治させる遺伝子治療法の開発に中心的に携わった。てきた研究者だ。アスベスト疾患の中皮腫は早期発見が困難な上、抗がん剤や放射線治療の効き目が薄く、有効な治療法がまだ確立されていない。

そんな中、仲博士の画期的な遺伝子治療法にいち早く着目したのは、大阪府議会公明党の川岡栄一議員だ。いままだ確立されていない。そんな中、仲博士の画期的な遺伝子治療法にいち早く着目したのは、大阪府議会公明党の川岡栄一議員だ。

中皮腫に画期的効果が期待されるSOCS遺伝子治療法



川岡議員が衝撃を受けた遺伝子治療法の手順は、まず中皮腫患者の胸膜の中に胸腔鏡を挿入し、がん細胞の増殖を抑制する働きを持つSOCS(ソックス)分子を3回に分けて投与。すると、それまでがん細胞を異常増殖させていたSTAT(スタット)分子の働きにストップがかかり、やがてがん細胞だけを死滅させていく。

がん増殖を抑制する分子 マウスでは明確な治癒効果

くというものだ【図参照】。これまでマウスによる実験で画期的な治癒効果が証明され、カニクイザルを用いた副作用の有無を調べる実験でも安全性が確かめられている。

医療基盤研究所によると、現在、前臨床試験のうち試験実施適正基準(GLP)に基づいた実験と、製薬会社の協力による製造工程における品質試験を続行中。全

独立行政法人
医療基盤研究所
仲哲治 博士



難治性疾患に政治の力を

ヒトへの投与となる、遺伝子をかんに細胞の中に直接運ぶウイルスベクター(媒体)が大量に必要になるし、密閉性の高い病室設備も不可欠だ。そのための資金は桁違いになる。公明党をはじめ政治の力に期待するのは、こうした希少性、難治性のがん対策こそ、優先順位を付け、重点的な予算配分を進める注視が必要だろう。

来年度中にもヒト治験開始へ

しで順調に作業が進んでおり、来年度中には国立がんセンターでのヒトへの治験段階に入れるのではないかと(仲博士)という。

世界的規模で被害拡大の歯止め必要

仲博士と面識のある「中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会」の古川和子会長は、「遺伝子治療法の開発はまさに夢のような話だ。主人はアスベスト疾患で14年前、60歳で亡くなったが、『死んだら、先生たちの治療に役立つよう解剖してほしい』というのが遺言だった。治療法が実現すれば、亡き主人も本当に喜ぶと思う」とほほ笑んだ。

アスベストは天然の鉱物で、毛髪の1000分の1という肉眼では見えない極めて細かい繊維の束でできていく。世界には今なおアスベスト使用量が伸び続けている国々もある。患者・家族の会はこうした海外のアスベスト被害者団体との連携も進めている。治療法の開発とともに、今後、世界的な規模で被害拡大に歯止めをかける運動も必要だろう。

また、過去のアスベスト使用の膨大さと長い潜伏期間を考えると、将来的に患者数が飛躍的に増える可能性が高い。さらに私が憂慮しているのは、アスベストと同様の大きさ、体内での耐久性を持つナノ粒子の吸引問題だ。アスベストと同様、注視が必要だろう。